第 3 回 臨床文藝医学賞
受賞作：H『いっそ八犬士になりたい』[1]

受賞者インタビュー

みと：作品に対する思いとかアピールポイントとか何か言いたいことなどありますか？

H：今年、小学 6 年時担任教諭の退官のため同窓会が開催され、つまり偶然に、地元の友人らと再開しました。彼の新居にお邪魔した際に出逢ったのがアサラト（パチカ）で、私は西アフリカをルーツにするその打楽器に魅せられ、翌日にメルカリで購入しました。眼球や睾丸を思わせる形態で、様々な演奏法が存在します。YouTube でも演奏法や製作過程を調べましたが、何より彼に直接教えて貰う事で楽しく学ぶことができた事が心に残ります。

本作品は、自宅で練習（アサ練）をしている時に録音しました。母親の包丁とまな板が奏でる音と自分の楽器の音が交差している時に、咄嗟に録音することを思い立ちました。テレビドラマのヒロインのセリフが偶々録音に混入したものをそのままタイトルとしました。

みと：アサラトとは知りませんでした。

この曲を聴いて私はジョン・ケージの『4 分 33 秒』を想い起こしました。

無音の中にも譜面に載らない音があると思うのですが、その譜面に載らない部分を極大化させると 4 分 33 秒のようなリズムやメロディのない音楽になるのでしょうか。

H さんの楽曲は生活音を取り入れたものが多いですね。多いですねというほど聴いてませんが。そうした偶然入り込んだもののリアルというところに関心があるのかなとも想像しますが、そのへんのところはどうでしょうか？

私は映像でもそうですけど、たまたま映り込んだ風景や音や光が好きです。そうしたものが映画や音楽になっている、ということがありますね。

H：ありがとうございます。寄せて考えて下さってありがとうございます。そうですね、くらしはキーワードです。

https://youtu.be/lVPLIuBy9CY

初めの 3 分ほどだけ、ご覧いただければ。

みと：リンクありがとうございます。面白いですね。

全ての活動は音であり、リズムのない運動はないと。

H：そうです。なので、4 分 33 秒も、リズムがあり、しかも演奏会場によって毎回違うということになるのかしらと。メロディやハーモニーは、3 要素とはいうのものの、上モノですね。

楽譜のない音楽を演る人を、楽譜がある音楽をやる方が、どうしても否定的に捉えがちだったりします(実際はどうかは別

[1] https://youtu.be/fJtafNQMHmw

としてです。)教会音楽から発展していった西洋ークラシックがチャーチで、それ以外はマイノリティーという見方もあるかと思います。
みと：以前も教えていただいたと思うのですが忘れてしまったので確認させてください。
楽譜に載る要素がメロディとハーモニーでリズムは楽譜に載らない？
H：いえ、西洋音楽の楽譜はよく出来てて、リズムも全部記載されていますね、というか一番簡単な楽譜はメロディが書いてあるわけですが、休符と音符がかいてあるので、そういった意味でリズムが書かれています。しかし、例えばドラムは譜面はないことも多いですね。吹奏楽やクラシックでドラムを使う場合などは事細かに書いてあったりするようですが、なんとなくこういうグルーブでやろうね、ということだけ決めて、たとえば８ビートでやろうねとか、ワルツで、とかですね。それを言葉で決めたら、あとは全員がある程度、リズム/グルーブ像は共有して、セッションを行います。(かなりジャズ寄りに説明しています)
そういう意味では譜面にのらない。なぜなら最も基礎だからですね。あとですね、今回の作品はポリリズムが面白いなと思ったのがありますね。自分の楽器音と調理音と複数のリズムが並行することがポリリズムですが、そういった状態になってるなと思い、その時に録らないとーと、それこそ焦りつつも興奮しながら録音しましたね。
みと：なるほど。リズムを決めていないというか決めようがないですよね。そういう瞬間を記録したということですね。
セッションをするときに、リズムを決めないでやろうということはありますか？
たぶんリズムの変化を感じて合わせるということはあると思うのですが、ここでポリリズムになったなとか、ポリリズムで行こうとか、そろそろ戻ろうとか、そういうことはありますか？
H：リズムを決めないで始めるセッションもあり、私は好みですが、誰かがリズムの形を提示して大体は落ち着く事が多いかと。全く決めないのはルバートといって、大きい波のような演奏になる事もありますし、この間聞いていただいたようなフリーの場合にはあえてリズムを共有しない、と言うことも全然アリですね。ただそれぞれの人が何がしか演奏しているとき、二つ以上音が出ていれば、それはリズムがあると言えると思います。不規則なリズムもリズムに含めれば、ですね。
ジャズや、あとアフリカ民族音楽のセッションも、ソロを回します。その時に、まずは合わせて初めて共有したら、途中から逸脱して、また戻ると、そこが見せ場ということはよく起きますね。崩壊する時もありますが（笑）。
みと：8 ビートとかワルツとか異なるリズムでお互いにやっていても 2 人でやっているという場というか意識が共有されていれば、それは単一のリズムであるとも言えるということでしょうか。

リズム同士が交わっているかどうか、というところですよね。
ただ H さんは少なくともテレビの音と料理の音を聴きながらアサラトを鳴らしている。テレビの音は H さんの音とは出合っていないですね。お母さんの料理の手は H さんのリズムには共鳴しているかもしれませんね。この 3 つがすべて同じ相のもと、ということはないですね。少しずつズレている、それは面白いですね。
それが面白いというか、それが H さんの言うところのポリリズムでしょうか。そこにはすれ違いもあるし、出合いもある。お互いに交わるものや交わらないものが混ざり合って世界を形作っているというか象っているというか、それがいつのまにか世界になっている、或いは音楽になっている、そうしたことの驚きを H さんの音楽はあらためて教えてくれている、という気がしました。
H：意識が共有されていれば、それは単一のリズムであるとも言えるか。私はそう思います。リズム同士を交わらせるには確固たる意志が必要です(合唱のパート訳とか輪唱とかイメージしてもらえるといいかと)。
異なる物を混ぜるには、相手が何をしているかを少なくとも耳ではきいていて、しかもベースや背景として何か共有していることを前提に、それぞれ、あるいはソロをとる人が、意図的にずらしてそれを楽しんでいるという、そしてそれを回りも察したときには、楽しいことになると思いますね。
テレビについては、ですので今回は結構、後付けと申しますか、私からすればそういえばあったなくらいでした、が、録音しようと思ったときには、今しかないと思った訳ですね、テレビ小説は基本母が見ているものなので。
少しずつズレていて、面白い。そうですね。イデアとしては、というか合奏をするなら、本当は、一つの音楽を共有しようとして、ワザとずらしたりするのが、楽しいですし、合奏･アンサンブルとしてはそれを目的にするものですがつまり意図的かつ同時多発的、即興的ポリリズムは至高ですが、ただ、少なくとも自分だけでもノッている状態なら、その回りの音も音楽･リズムだと言えてしまうかなと思いますかね、今回はそういうケースかなと。仰ったように母がこちらの音を聴いていたかも知れません。聞こえてはいたと思います。合奏をしようといって、した訳ではないですから。
ありがとうございます。教えるなどおこがましいですが、リミットを決めてくださり、ありがとうございます。
みと：鳥の囀りも音楽であると言ったのは誰だったか、母の包丁の音で目が覚めると書いたのは誰だったか、忘れましたが、そうしたものを同時に喚起させますね。
H：本当ですね、それらはもう、本当にその通りだとおもいます。
囀りをフレーズにした曲を引用しようと思いましたがリンクが切れていました･･･。
あと『鳥の中にも鳴き方が下手な奴(鳥)

がおるよ』と教えてくれた子が大学のときにいまして。大学はテニス部の、バイオリンの上手なお坊ちゃんでしたが、たまたま音楽の話をしたときのその話というか彼の視点が、私は好きでしたね。
(2023.5.19)

臨床文藝医学賞募集要項

自主制作映画、音楽、写真集、詩集、お蔵入りとなっている修士論文、小説・断章等々、売れることを意図せず人知れず書かれ、制作された作品をドキュメントしブログ上に掲載しております。作者の許可があれば作品も同時に掲載しますが、作品の公開を希望されないものについてはもとの作品を鑑賞していなくてもわかるようにメンバーがレビュー（吟味）します。著作権は著作者に帰属します。エントリー・掲載後に掲載の中止を希望される際にはご一報ください。

年に 1 回、エントリー作品の中で特に面白いものがあれば臨床文藝医学賞を選出します（特典はございません）。

各年度の募集は 1 月 1 日～同年 12 月 31 日までとします。賞の選出は翌年度の春～夏頃で予定させていただきます。

売れるかどうかにとらわれず、何かをつくり、考えることの歓びを分かち合える場となればと思います。

分野、ジャンルは問いません。応募は氏名（ニックネーム、匿名希望も可）、題名を添えて下記のアドレスまでお願いします。

rinshoubungeiigakukai@gmail.com